

知られざる郭沫若の諸事について(3) 【サマリー】

齊藤孝治

一昨年、昨年発行の論文集で発表した「知られざる郭沫若の諸事について」では、抗日戦争中、日本から帰国した郭沫若の上海、南京、武漢における活動と彼の友人で日本人ながら中国大陆に赴き抗日戦争に加わった青山和夫のことを論述しました。今号では、やがて二人が到達する抗日戦争の“最後の砦”、重慶と日本との関わりについて書いております。

実は、一八九五年、日本はその重慶に租界を創設していたのです。日清戦争で中国に勝利した結果でした。

租界には日本人が進出し、彼らは、絹糸、絹織物工場を主に次々とマッチ、製粉、鉄工、船舶修理各工場を創り、事業を拡大していったのです。

事業を担ったのは、いわゆる大企業経営者ではなく、ごく一般的な人たちでした。

とはいえ日本の進出で民族意識に目覚めた重慶の人たちは、そうした日本人の経済活動を「日本の中国侵略の一環」として捉えたのです。

租界の日本人や日本企業は、五・四運動、五・三〇事件など事あるたびに影響を受け、抗日排日運動の標的にされました。

結局、彼らは、一九二七年四月に相次いで起きた南京、漢口事件の余波もあり、租界開設以来、築き上げてきた全てを投げ捨て帰国せざるを得なかったのです。

その裏には、旧態依然たる軍閥の横行や権力を持つ国民党の腐敗、民衆の支持を得る共産党の伸長が微妙に絡んでいました。

今号では前記のことを詳細しました。

次号では、日本に引き揚げた彼らその後、どういう遍歴を辿ったかについて論述することになっています。

日中関係がぎしぎししている昨今、彼らの重慶での逸事が他山の石になれば幸いに思います。